

## 円空造仏の動機について

### はじめに

松尾芭蕉（一六四四—一九四）の同時代人で、諸国遍歴の修験者であった円空（一六三三—一九五）は、我が国古来の山岳信仰・修験道、あるいは密教的仏教の伝統の上に立って大量の作品を残している。長谷川公茂氏の調査によると、そのうち一九八三年十月現在で知られている「円空仏」は四、三三〇体、和歌は一、六〇〇余首で、他に円空が志摩半島の志摩と阿児でなした大般若經二点の修復とその時に描いた絵合計一八四枚も現存しているが、円空仏は、愛知県に三、一三二体、岐阜県に一、〇九六体と、特に尾張と西濃諸地方に多く残っており、愛媛県で一体、福岡県で三体発見された円空仏は、いずれも他地方から入手した個人の所蔵で、他はすべて奈良県から北海道にかけての諸地方に散在している。<sup>(1)</sup>

青 山 玄

円空の作品に対する特別の関心は、愛知県では既に一九三〇年代前半から始まっていたが、一九五六年に岐阜大学助教授であった土屋常義氏が、「円空とその作品——郷土出身の仏像彫刻家」と題する論文を発表し、翌年八月、谷口順三氏が雑誌『民芸』に、「円空上人鉅ばつり仏巡礼」の一文を発表すると、この一九五七年の秋から六〇年の秋にかけ、岐阜県立図書館・東京国立近代美術館・鎌倉の神奈川県立近代美術館などで、相次いで円空の作品展が開催され、俄然多くの人の注目を浴びるに至った。そして数多くの新しい円空研究が発表されるようになり、一九七一年八月に、棚橋一晃氏と長谷川公茂氏の呼び掛けで、谷口順三氏を理事長にした円空学会が設立されると、会員数はたちまち一五七人になり、七年後には二三四人に増えている。

しかし、この研究会の会員たちが次々と出版する様々の優れた著

作や研究報告を通覧していて、一つだけちょっと物足りなく感じていることがある。それは、キリシタン史の側からの視点の欠如である。近年の円空研究者は誰一人、円空の生まれ育った美濃の中島郡辺りは、彼の少年時代に無数の農民がキリシタンとして検挙され処刑された所であること、そして彼が数え年三十二歳で数多くの彫像を作り始めた寛文三（一六六三）年は、その二年前から本曾川を挟んだ対岸の尾張国中島郡やその隣の扶桑郡の数十ヶ村で、同様にして無数の農民がキリシタンとして検挙されていた時であることに言及しておらず、この重大な歴史状況を全く見落しているように見えることである。これまで成されて来た数々の敬服に値する円空研究に加えて、私が補足したいのは、ただこの一点だけである。しかし、この一つを見落すだけで、彼がなぜ一生かけて、ほとんど休みなくあれほど多くの神道系神像や、仏教系観音像・護法神などの守り神、ならびに貧しい一般庶民や農民風の姿で十二神将などの護法神や無数の千体仏を刻み続けたのかの動機の説明が、不十分、いや不可解にさえなってしまうのではないかと恐れる。

## 1 十数年来マスコミなどで広められた円空像と

### その問題点

谷口順三氏は、円空の生まれ故郷と考えられている本曾川西岸の村に取材に行った時、ある集まりで一人の故老が「彼はしんがい子

〔私生児〕だった」と言ったので、居合わせた人たちの多くは急に沈黙し、中には不快だと言わんばかりの顔をした人もいて、座が白けたそうだが、「私はこの話に乗った。そして、追跡することにした」と書いている。そして、円空は母が奉公先でか、あるいは夜這われて身ごもった他郷の若者の胤で、その男は引き取ることも出来ず、名乗ることも出来ない事情にあったのではなからうか。この疑念が真に近いとなると、彼と母は、村で食出者扱いされていたであろう。この日陰者暮らしは、慶安三（一六五〇）年九月の大洪水（死者一、五五三人を出したこの時期では最大の洪水）で母が死ぬと終止符を打った。そのとき数え年十九歳の彼が仏門に入った動機は、「洪水で非業の死を遂げた母の鎮魂供養にあった。…最低の暮らしで結構、生きてゆけて母の鎮魂供養の叶う寺なら、どこでもよい、というのが、切羽詰った彼の心情であつたらう」などと想像を大きく飛躍させ、更に「やがて彼は寺から蒸発する。原因はさだかでないが、大恋愛事件を惹起したからだと推察される。云々」と書いている。<sup>(2)</sup>

谷口氏のこの奇抜な想像に刺激されて、作家の岸宏子さんが作ったラジオ・ドラマ「木っ端聖・円空」が、一九七四年三月から八月まで東海ラジオで放送され、一九八八年七月二日にも、似たような筋のNHKテレビのドラマ・スペシャル（早坂暁作「円空」）が、放映されている。いずれも谷口氏の想像を基礎にして、円空を青年期



円空上人作 十二神将 右より毘羯羅大将，招杜羅大将，真達羅大将（愛知県扶桑町・正覚寺蔵）

に女性問題を起こしたマザー・コンプレックスを持つ男として、一生女性に深く関係していたかのように描いているが、しかし、円空の母がいつ死んだのか、果たして洪水で死んだのか、円空がいつ寺に入ったのかなどは、何も分かっておらず、一人の老人が言い出した言葉から発展した実証性に欠ける想像では、誠に心許ない感じがする。第一、谷口氏が書いてるように、円空が母への供養が動機で寺に入ったのなら、またマザー・コンプレックスから母に生き写しの女を慕うような男であつたなら、そして「生母鎮魂の一字を建てるため、諸国勧進を決意した」のであつたなら、そのような個人的動機からでは、趣味で造仏に努めることはあつても、命がけで、しかも北海道にまで渡って厳しい山伏修行を続けたり、一生結婚せずに全国行脚を続け、十二万体の造仏に励んだりするようなエネルギーが生じなかつたと思われる。

もちろん谷口氏は、母の非業の死や全国行脚から知った、洪水などの天災に脅かされる無数の庶民の救済のために、と言うであろうが、それにしても、名古屋の荒子観音寺の『浄海雜記』所収の「円空上人小伝」に、「自ら十二万ノ仏軀ヲ彫刻スル之大願ヲ発シ」だの、「諸国ヲ巡歴シ佛像十二万軀ヲ刻セリ」などと書かれており、<sup>(3)</sup>円空自身も死ぬ五年ほど前、奥飛騨上宝村金木戸の観音堂で彫った今上皇帝像の背面に「元禄三庚午九月二十六日 今上皇帝 当国万仏 十マ仏作已（十万仏作り已わる）」と墨書している十二万體と

いう数は、一日平均一〇体ずつ彫っても、三十三年間を要するおびただしい量である。もつとも、円空がこのような大願を起こしたと思われる彼の人生中期に作った千体仏は、写真家栗原氏の実験によると、<sup>(4)</sup>一体につき四〇回から六〇回位の鑿の運びで刻まれるそうだから、これなら手慣れた円空が一時間に一〇体余、一日に一〇〇体以上刻むことも可能であろう。また伴蒿蹊が寛政二（一七九〇）年に著した『近世畸人伝』の正編第二巻の「僧円空」<sup>(5)</sup>にも、「やがて彼鉈にて、千体の仏像を不日に作て池に沈む」とあるので、円空は実際に千体の仏像を数日で彫ることが出来、人生後半の二十年間ほどの間に、その大願を達成したのであろう。しかしそれにしても、何か止むにやまれぬ余程の強い動機づけが必要とされる大業である。

長谷川公茂氏は、その動機を円空が作った一、六〇〇余首の歌の中にたずね求めている。円空の歌には心を歌ったものが多く、大自らの森羅万象の中にも神々の働きや仏性を眺めている、いや芸術家の慧眼をもつて見抜いている、という印象を与えるものが少なくない。それで長谷川氏は、「彼の菩薩行は、いうまでもなく宇宙の真理大道を悟り得た、その喜びを少しでも多くの人々に頒ち与えようとの大慈悲心に外ならない」と書いている。<sup>(6)</sup>確かに、悟りの境地に達し得た中年・晩年ごろの円空は、そのような心境であったと思う。しかし、私はこれに加えてもう一つ、若いころの円空には、江戸幕府の政策によって不当に厳しく弾圧され殺された無数の庶民の

霊を慰めるためという、他の仕事を手につかない程の強烈な動機があったのではないかと考える。そこで、私のこの想像が根拠のない単なる思い付きではないことを、説明してみたい。

## 2 円空の生まれ育った美濃尾張の時代状況

前述した『浄海雜記』には、「円空上人、姓ハ藤原、氏ハ加藤、西濃安八郡中村之産也」とあるが、「西濃安八郡中村」には、円空仏も円空に關係した伝えも全くなく、『近世畸人伝』にはその出生地が「竹ヶ鼻」となっていることから、その竹ヶ鼻の南二キロ半ほどで、円空が十一面觀音像を残した觀音堂のある「中島郡中村」の誤りであろうと言われ、円空の出身地は中島郡中村（現在の羽島市上中町中）であるというのが定説になっているが、このちょっとした書き誤りのために「姓ハ藤原、氏ハ加藤」の記述まで頭から疑って、円空を素性の分からない私生児のように考える必要はないであろう。「作品は作者をあらわす」と言うが、彼の数多くの作品は、彼が単に天才的芸術家であつただけではなく、同時にかなりの教養の持ち主であることを示しており、寛文十一（一六七二）年前後に一年間余り滞在した大和・法隆寺の巡禮春塘から、同年七月十五日に「法相中宗血脈」を、また長旅の途中に立ち寄った近江・園城寺の尊榮大僧正からも、延宝七（一六七九）年七月五日に「仏性常住金剛宝戒相承血脈」を受けていることを考え合わせると、やはり一

応しつかりした良い家柄の出身者であったように思われる。

『浄海雜記』にも、前記に続いて「幼キ時、台門ニ歸シ、僧ト為ル。稍長ズルニ及テ、我尾高田精舎ノ某ニ就キテ胎金兩部ノ密法ヲ稟ケ、□□無垢清淨捨身ノ行者ト為リ、純ラ行基僧正ノ人爲ルヲ慕ヒ、云々」とある。彼の高い教養は、幼い時から天台宗の寺で学んで僧となり、更に行基の開基と伝えられる天台宗山門派の高田寺で学んだことを基礎にしたものではなからうか。円空を十九歳で地元の浄土真宗東本願寺系の徳仁寺に拾われた、と想定した谷口氏は、愛知県西春日井郡師勝町にある高田寺は、貞享二年に中興されたのだから円空の青年時代には荒廃していたと考え、もし彼がこの寺で胎蔵界と金剛界の密法を稟けていたのなら、密家の骨格が具わっていた筈だから、後年「津輕藩から追放されたり、松前藩から仏師扱いされたりするようなことはなかった、と思える」などと主張して、『浄海雜記』の記事を俗説として否定しているが、しかし十七世紀中頃の高田寺が廃寺であったという明確な証拠が残っていない以上、事はそう簡単に片づけられないように思う。確かに、キリシタンに対して殊の外寛大であった尾張の初代藩主義直公は、仏教を嫌って援助しなかったもので、尾張の他の多くの寺と同様、高田寺も十七世紀中頃に苦しい状態にあったであらう。しかし、だからと言ってそこに住職はいなかったとは言いい切れず、アンジェリス神父やカルヴァリヨ神父らキリシタンの宣教師たちが、変装して実際に巡回して

いたことが発覚した津輕藩や松前藩が、「出家ゾクニヨラズ仏道ヲ勤メ申者、他国ヨリ町中へ参リ有之候ハバ注進可申事」という、幕府が慶安五年正月に出した布告を特別厳しく守って、どここの寺にも属さない旅の僧円空を冷遇したことも、幕府向けの体面を重視した当時としては、大いに有り得たことと思われる。

円空が生まれた頃、そして少年だった頃の寛永年間（二六二—四四）は全国的に数多くのキリシタンが検挙処刑された時であるが、『尾濃葉栗見聞集』によると、美濃国でもこの寛永年間を中心にしてキリシタンを出した村が二七一ヶ村もあり、美濃二一郡のうち一七郡に及んでいて、小さな羽栗・中島二郡からも二六ヶ村がキリシタンを出している。その中には竹ヶ鼻村も、また中村の近くのいろいろな村も名を連ねているが、処刑されたキリシタンの数は知られていない。<sup>(9)</sup>しかし、寛永年間にはキリシタン三百数十人が処刑されただけで済んでいた尾張藩で、寛文年間には北部諸郡の一一四ヶ村で二千数百人のキリシタンが処刑されたことから類推すると、早くから地方伝道の盛んであった美濃国二七一ヶ村から検挙され、キリシタンとして処刑された農民は、数千人に達したと考えられる。<sup>(10)</sup>後年修験者として優れた能力を発揮した円空は、察するに、信仰のために殺されたこれら農民たちの霊の嘆きを若い時から鋭敏に感知し、少なくとも初めには、それら無数の霊の鎮魂供養も一つの目的として、密教系の寺に学んだのではなからうか。

### 3 造仏に立ち上がった円空周辺の精神的風土

古来日本各地には、居住地の近くの山や川や池や峠などには、それぞれその地の神霊が住んでいて、時折人間に祟ることがあるという信仰が盛んであったが、岐阜県や愛知県でも同様で、例えば平安時代初期の天長三（八二六）年に美濃介に任ぜられて赴任して来た藤原高房の時、たまたま安八郡の堤防が決壊すると、民衆は池の主が祟ったのだと言って恐れたそう、高房は、民の利益のためにはたとえ死んでも恨むことはない、と言って進んで工事に当たり、灌漑の便を計ったそうである。また席田郡で巫女が魔術を使って徒党を組み、民衆を惑わしていることを聞くと、高房は単身その地に入り、民衆を惑わしていた賊徒たちを一掃して評価されたと伝えられている。この地方の住民が地元神霊の働きを恐れ、それを宥めるものを高く評価する傾向を示している話は他にもいろいろあるが、民衆のこのような傾きに呼応して禍を及ぼす霊を排除するかのよう、平安時代中期の十世紀初めごろから室町時代中期の十五世紀にかけて、この地方では伊勢神宮を分祠した神明社をはじめとして、神社が非常に多く建立されている。それらは時流の変遷興亡の中で衰退したり、祭神・本地を改めたりして複雑に変遷しているが、円空が造仏を始めた頃に滞在した奥美濃地方では、多少の変遷は経ながらも、千年以上にわたって高賀山信仰が根強く続いている。

そこでこの高賀山信仰について調べてみると、それは一、二、三、四米の高賀山の北方にそびえる二、〇〇〇米級の白山連山で見られるような、言わば人里遠く離れ火を噴く恐ろしい山の霊に対する白山信仰とは異なっていて、むしろいつも人々の生活圏にいて山の幸を司る山の神、山麓一帯の農耕にとって大切な水や雨を司る恵みの神に対する信仰と言うことができるようで、円空も、このような一般民衆を助けて働く神に特別の関心を示していたのではないかと思われる。伝えによると、霊龜年間（七一五―七一七）に瓢箪<sup>ひょうたん</sup>嶽<sup>がき</sup>に姿・鳴き声が牛に似た妖魔が住み着き、村人に危害を加えたので、養老元年（七一七）勅命によって退治された。しかし、その後村上天皇の天曆年間（九四七―九五七）に再び妖魔の魂が現われ村人を脅かしたので、天皇の勅命を受けた藤原高光が、高賀山麓に<sup>く</sup>國常立尊・<sup>く</sup>國狭槌尊など二一の神々を祀って退魔の行事を行い、数年の後、虚空藏菩薩の加護によって遂にこれを退治し、更にその妖魔に關係していた現在の郡上郡八幡町那比<sup>なひ</sup>やその他の地に六社を建立したそうである。この伝えがどの程度の信憑性を持つのか分からないが、高賀神社・那比神社をはじめ、この地方の神社には虚空藏菩薩の像が圧倒的に多く奉納されており、次いで薬師如来・十一面観音などの像が奉納されている。いずれも災害・病氣その他で助けを必要としている人を救う諸仏であることは、注目に値する。円空にとり、一番大切なのは、宗教の教義でも政治権力の安泰でもなく、民衆を救って

くれる神仏の働きだったのではなからうか。

戦国時代にどの政治権力にも頼れなくなり、仏教のどの宗派の教えにも次々と疑問点が生じて来て、全面的に心服できなくなり、在来のどの神仏に祈って見ても願いが聴き入れられないように思われた時、明日の命も分からない極度の不安の中で、一時的ではあったが、キリシタン信仰が美濃尾張の民衆の間に広まったのも、彼らの間に何よりも自分たちのために実際に働いてくれる神の力を高く評価する、経験主義的実証主義的精神の持ち主が多かったからではなからうか。一五六六年に京都に来たルイス・フロイス神父は、同年九月五日付の書簡に、美濃の国王は父王を死病から救うことの出来なかった禪寺を破壊するよう命じたと書き、翌年六月十二日付の書簡にも、美濃の国王は仏僧たちに宗論させ、勝った者を自分の師としている、美濃では人々が祖先の伝統よりも道理に叶ったことを尊重している、などと書いているが、当時のキリスト教宣教師たちが我が国に導入しようと努めたスペイン・ポルトガルの色彩の濃い改革的キリスト教は、教理を現実的経験に即して合理的に解説するもので、既に在来の宗教思想に批判的になっていた日本人にとっては、誠に魅力的に感ぜられた新しい教えであったと思われる。しかしそれだけではなく、そのキリスト教には、初めから多少土俗的庶民的な密教的要素が多分に伴っていて、その恵みは一番基本的な教理と祈禱文、ならびに洗礼・葬儀その他のやり方さえ身につければ、宣

教師なしにでも立派に受け続けることができ、また子孫に伝えて行くこともできる性質のものであった。このことも、前者に劣らぬ大きな魅力であったと思われる。事実、当時の我が国のキリシタンたちは、聖書研究よりもこういう密教的信仰形態と、神の働きを生き生ぎと体験することに、より大きな興味を示していたようで、イエズス会員の書簡や年報などには、それを立証するような話が、かなり早い頃から沢山書かれている。<sup>(13)</sup>

宣教師の話を聴いて心の眼が開かれ、長年の宗教的疑問が解消した後は、ただ一番基本的な教理と祈禱文、ならびに洗礼・葬儀その他のやり方を身につけただけと言ってよいような美濃尾張のキリシタンたちが、宣教師がごく稀にしか来訪しなかった遠隔の地で何十年間も信仰を守り通し、それを隣人に広めたり子孫に伝達したりし続けていたのは、特に九州での宣教師たちの報告に多く読まれる不思議な癒しや霊の働きを、彼ら美濃尾張のキリシタンたち自身も、度々生き生ぎと体験していたからではなからうか。数多くの不思議な出来事を体験し、それによって自分たちの祈りや必要に 대응てくれる神の保護や導きを生き生ぎと感ずることがなかったら、宣教師の指導から遠く離れ、秀吉や家康の支配下で始まった難しい社会事情の下で長く信仰に留まり続けたり、その信仰を密かに隣人や子孫に伝え続けたりすることは、ほとんどあり得ないように思われるからである。

ところで、大きな不安と苦勞の中にあつても、こうした神と共に生きる精神的幸せを見だし、静かに靈の力を磨いていた多数の善良なキリシタンたちが、幕府の方針で一斉に処刑された後、生き残った村人たちは、どんな思いで生きていたであらうか。察するに、何年間も勞苦を共にした戦友に先立たれた後の、生き残りの兵士たちのような気持ちだったのではなからうか。一六一〇年代から一六三〇年代にかけての元和・寛永年間のキリシタン類族は、全国どこでもほとんどお構いなしであつたし、尾張藩の場合には、一六六〇年代の寛文年代においても、三千人にも達したキリシタン類族はすべてお構いなしであつたが、幕府老中の画一的なやり方に対する批判精神がこの地方で根強く続いていたことを考慮に入れると、これらのキリシタン類族は、罪なしに殺された身内関係者の供養に熱心であつたと思われる。中島郡、葉栗郡のように、度々大洪水に見舞われた地方では余り残っていないようだが、その他の地方、特に木曾川流域でも洪水から守られることの多かつた尾張北部の諸地方では、キリシタンの処刑跡に必ずと言ってよい程、沢山の古い小さな舟型地蔵が建てられ、今日まで残っている。中には、江南市石枕の墓地にある高さ七〇センチ程の小さな三界萬靈等のように、この地方でキリシタン二千人数が一斉に処刑された「寛文七年十月七日」の日付を入れているものも、扶桑町高木の恵心庵のように、処刑後の二十三年忌に村人たちがお堂を建てて供養した記念のものもあり、

また昔キリシタンが住んでいた屋敷の跡地とされていて、その後はそこに住む人がなく、村の位置が少し移動して、その跡地の付近一帯が近年に至るまで桑畑になっていた所もある。大量に処刑された後、まだ十分に供養されていないと思うキリシタンたちの住居跡に住むことを、当時の村人たちが恐れたからではなからうか。これらの事柄をすべて考え合わせると、円空が造仏に精を出していた頃のこの地方の農民が、処刑されたキリシタンたちの鎮魂を、一大関心事にしていたことは明らかで、人一倍優れた靈能を具備し、人々の恐れる靈の祟りに関心を示していたと思われる円空も、故郷の村人たちのこのような動向に無関心ではなかつたであらう。

キリシタン檢舉に協力させられるような、仏寺の住職に成ろうとしなかつた円空は、一七九〇年に出版された『近世畸人伝』に「稚きより出家し某の寺にありしが、廿三にて遁れ出、富士山に籠り、又加賀白山にこもる」とある伝えに従うと、子供の頃から字んでいた寺を数え年二十三歳で出奔し、三十二歳になった寛文三年に奥美濃の郡上郡美並村で造仏を始めるまでは、修験者の修業をしていたようだが、三十五歳の夏に北海道で刻んだ観音像の背銘に「江州伊吹山平等岩僧内　　始山登　円空」と刻書していることから察すると、この修業期間中に伊吹山の南西面八合目（一、二五〇米ほどの地点にある平等岩でも修業したと思われる<sup>14</sup>）。この伊吹山が、彼の故郷ならびにキリシタンが多く処刑された西濃と尾張北部諸地方に



とり、乾<sup>かん</sup>または戌<sup>い</sup>の方向〔北西または西北西〕に位置していることは、ちよつと注目値する。京都の国際日本文化研究センターの久野昭教授によると、陰陽道の影響かと思うが、古来日本では荒ぶる霊を鎮めるために、しばしば居住地から見てこの方向に当たる所に社を建てて鎮魂の祈りを捧げていると思われるからである。例えば崇神天皇は不作が続いた時、飛鳥地方からすれば乾の方向になる竜田に社を建てて、大物主神をはじめ諸々の国津神を祀ったと伝えられているし、十世紀の中頃には菅原道真の怨霊も、既に九世紀後半以来祇園御霊会が挙行されていた京都の八坂神社の乾の方向に建てられた北野天満宮に祀られている<sup>(5)</sup>。事によると円空も、西濃と尾張諸地方の怨霊を慰める意図を持って、伊吹山の平等岩で祈ったのかも知れない。青年期の修業場所として、円空がこの平等岩だけを挙げているのは、そこでの滞在が特別長く、意義深かったからではなからうか。多くの霊の供養を意図したと思われる千体仏を別にして、彼が観音像を一番多く刻んでいるのは、やはり鎮魂の意図の現われであろう。

このように見て来ると、円空造仏の一つの目的、特に彼があれ程多くの庶民風の仏像を刻んだ一つの目的は、社会的犯罪なしに、ただ幕府の方針で処刑された全国無数のキリシタンの鎮魂供養にあった、と考えるのもよいと思うが、このような見解を抱いたのは、私が最初ではない。私が親しくしていた一宮市の郷土史家森徳一郎氏も、

昭和十年に出版した『尾張切支丹年表、尾張切支丹札所巡礼』の中で、尾張国斎藤の折橋薬師堂（昭和七年に正覚寺と改称）の円空仏に關連し、同書一一一頁に、

「嘆くあり憤るあり笑ふあり十二神将まるちる〔殉教者〕語るや」という歌を残している。円空が農民姿の美しい十二神将を残して行った、この斎藤やその近くの村久野は、多くのキリシタンが村方で殺された地であることも、付け加えておきたい。

# 注

- (1) 長谷川公茂『円空仏』保育社 昭和五十七年 一四四頁
- (2) 谷口順三『円空』求龍堂 昭和四十八年 一四四―一四九頁
- (3) 丸山尚一『円空風土記』読売新聞社 昭和四十九年 一二五―一二六頁
- (4) 棚橋一晃『異端の仏たち』芸立出版KK 昭和五十二年 一八五頁
- (5) 羽島市史 史料下 四三五―四三六頁
- (6) 長谷川 前掲書 一四二―一四三頁
- (7) 長谷川 前掲書 一四九 一五一頁
- (8) 谷口 前掲書 一五一―一五三頁
- (9) 岐阜県史 通史編 近世下 八七八―八七九頁
- (10) 森徳一郎『尾濃の切支丹』（宝文館『切支丹風土記』近畿・中国編 一九六〇年）、青山玄『尾張藩とキリシタン迫害』（キリシタン文化研究会会報『昭和五十二年八月』）
- (11) 岐阜県史 通史編 中世 六七―一七三頁

- (12) 耶蘇会士日本通信 (察芳閣・異国叢書) 上巻 三五八―九三  
八一頁
- (13) 青山玄「東海北陸地方でのキリシタンの信仰生活」(『キリシタ  
ン文化研究会会報』一九八九年六月)
- (14) 長谷川 前掲書 一一二―一二四頁
- (15) 一九八九年七月十七日、国際日本文化研究センターでの研究発  
表 久野昭「祇園御霊会の問題」